

吉備国際大学
政策マネジメント学部研究紀要
第3号, 121-127, 2007

林業関係者の意識が森林管理に及ぼす影響

森野 真理¹⁾, 堀内 史朗²⁾

Relationship between forest management and awareness of foresters

Mari MORINO Shiro HORIUCHI

要 旨

本論文では、わが国における森林管理を促す要因に関してレビューを行った。林業の経済性だけでなく、その地域における林業をとりまく社会的・歴史的な背景が森林管理に影響をもたらすことを確認した。また、岡山県北部の西粟倉村を対象に予備調査を行った。比較的森林管理意識の高い林業従事者は、環境問題への高い関心、また日本人のライフスタイルを変革するといったモチベーションを有している可能性が示唆された。

キーワード：森林管理, 小規模林家, 村意識

はじめに

我が国の森林

森林には多様な機能がある。建築・家財・書籍などの材としての機能はもちろんのこと、大雨後の洪水を防ぎ乾燥期にも流域に水をもたらす水源として、CO₂を固定することで地球温暖化を抑止する機能もある(堺 2003)。また森林は動植物に生活の場を提供する。その環境は人間にとっても、心休まる場として、あるいは観光地として機能する。このような多様な機能を持つ森林を保全することには大きな意義がある。

現在、日本の国土の67%は森林によって覆われているが、古代から現代まで、森林が連綿と維持され続けてきたわけではない。もともと日本は高温多湿で森林の多い地形であった。しかし18世紀の初めごろに森林の大規模伐採が全国規模で始まった(筒井 1985)。各藩の築城造営の材として、また急激な人口増加にともなう農地開発、燃料供給のために、森林資源が過剰採取されたのである。また、当時の農業に不可欠であった肥料を採取するために、多くの土地が草地化されていた。

各地で植林が始まるのは19世紀の後半、江戸末期

1) 吉備国際大学 政策マネジメント学部 環境リスクマネジメント学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8

2) 東北大学大学院 文学研究科
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内

1) *Department of Environmental Risk Management, School of Policy Management, Kibi International University*
8, Igamachi, Takahashi, Okayama, 716-8508, Japan

2) *Graduate school / Faculty of Arts and Letters, Tohoku University*
Aoba-ku, Kawauchi 27-1, Sendai, 980-8576, Japan

から明治期にかけてである。森林資源の過剰採取により、各地ではげ山が広がり、自然災害も頻発していたことから、水害防止・土壌流出防止のための植林が行われた(筒井 1985)。まず、植林化されたのは、草肥以外の肥料の普及に伴い不要となった採草地である。選ばれた樹種は、成長が早く、用材としても有用なスギ・ヒノキが多い。また、採草地を意図的に放棄して雑木林にし、炭として販売するところも増加した。炭の需要が高い時代であり、百姓にとって重要な現金収入であったためである。ところが、20世紀前半の大戦争(日中戦争、太平洋戦争)によって植林事業は中断された。食糧増産や軍需物資の調達を目的とした資源の過剰採取によって森林破壊が進んだ。

再び造林が活発になるのは1960年代のことである。戦後復興期になり、住宅資材の需要が急増し、用材価格は急騰した。外貨準備金も少なく木材の輸入も困難だったこの時期、森林破壊と用材価格の高騰を背景に、拡大造林政策がとられ、全国各地に針葉樹が造林された。また、石油など、薪炭に替わる代替エネルギーの使用が始まり、薪炭用の雑木林は針葉樹林へと転換していった。拡大造林政策は、環境保全(水源涵養機能)と用材確保を両立させる政策として、国有林だけでなく、民有林においても補助金をもって推奨された(堀 2000)。こうして、わが国における森林の約4割は、針葉樹を主体とした人工林で占められるようになった(農林水産省大臣官房統計情報部 2002)。

ところが1960年代後半、高度経済成長期に入った日本は、海外から安い外材を大量に輸入するようになった。当時は、国産材も値上がりが続けたため、国内林業に対する影響は少なかった。しかし1985年のプラザ合意以降、国産木材は値下がりし始め、管理・製材費用などを考えると、木材を切り出すことで赤字になってしまう状況になった(遠藤 2002)。また、都市部での労働力需要の高まりに応じて農山

村では過疎高齢化が進展し、林業に携わり得る若い人材が少なくなってきた(堀 2000)。人工林は適度な間伐を行わないと、下層植物が乏しくなり、生物多様性は損なわれ、また土壌も流出しやすくなる(山本 2003)。都市化の中で村外に転出した者、また土地バブルのときに投機的に山林を購入した者など、いわゆる不在村所有者の森林については、とくに管理が困難である(志賀 2001)。皆伐したあと再造林されずに放置された森林は、必ずしも天然更新するとは限らず、なにより良好な木材資源を失うという経済損失が無視できない(堺 2003)。近年、経済発展を続けている中国で大量の木材消費が始まり、同国の木材輸出に歯止めがかかり始めたものの、日本が安い外材を海外から輸入している状況に大きな変化はない。結局、将来の収益を見込んで大量に植林された針葉樹林の多くが、将来の活用が見込まれることなく、管理放棄されてしまっているのが現状である。

日本の林業を支える要因

日本の林業は崩壊しつつある。その一方で、国土保全の観点から、管理放棄された森林は中山間地域問題として国政から捉えられるようになり、森林管理のために様々な政策が採られるようになってきた。近年では、林業者の経済マインドを喚起することだけでなく、流域住民を含めた森林の社会的管理、また森林ボランティアを通じての森林管理が注目されている(山本 1994; 志賀, 成田 2000; 山本 2003)。森林組合や第3セクターなどの機関も、さまざまな努力を通じて森林所有者に働きかけ、森林管理を促している(堀 2000)。

そうした中で、植林地が適切に管理されつづけてきた地区もある。森林所有者にとって、精魂こめて植林、管理してきた森林は、ただ金額で換算できるような資産ではない。森林とは、人々が関わってきた経験、または郷土や村社会に対する意識など、そ

うした無形の思いが組みこまれた資産である。実際に森林の施業を行う森林組合などの構成員も、ただお金になるから仕事に従事しているわけではない。林業に携わってきた誇り、村を守ろうという意識が森林管理に影響を及ぼしていると考えられる。たとえば佐藤 (1998; 2005), 林・野田 (2005) は、森林所有者の家意識・村意識が、森林管理に正の影響を与えることを示している。近年の傾向として、都会からのUターン、Iターン者などが林業に従事するようになってきた。彼らは都会の生活では感じられない、自然と接した職業への親近感から林業に携わっている (堀 2000; 志賀 2001; 上久保 2004)。製材会社のなかには、日本の森林を守りたいという気持ちで国産材を使っているものもある (遠藤 2002)。また森野 (準備中) は、鹿児島県屋久島において、森林管理状況の比較的良好な地区とそうでない地区を比較したところ、管理状況の良し悪しには、各地区の産業構造における山仕事への依存度 (山仕事以外の生業の有無) や、森林所有者と山仕事を行える施業者との地縁関係の有無などが寄与している可能性を示した。

森林管理を促す要因を分析するにあたっては、管理の経済性だけでなく、森林管理に携わる人々の職業意識や森林利用の歴史、また家・村意識を分析する必要があるだろう。だが、所変われば人も変わる。佐藤らが抽出した家意識・村意識は、日本の農山村社会の多様性を踏まえると (岡 1994), あらゆる場所で同じ意味を持つとは限らない。森林にかかわる職業の種類も、地域によって異なるであろう。Uターン、Iターン者などの新参者が地域社会にもたらす意義も、地域によって異なると考えられる。さまざまな地域でのケーススタディの比較こそが、森林管理に関する研究のために必要である。

岡山県西粟倉村の特徴

ここで、岡山県の森林管理状況について紹介す

る。まず図1に示すのが、2000年における市町村の森林率である。岡山県北部、ならびに西部が森林率の高いことが分かる。図2が、同じく2000年における各市町村の森林間伐林家率である。森林間伐林家率を管理水準の指標とした場合、岡山県北部地域で、比較的管理されていることがわかる。

われわれは岡山県北東部にある西粟倉村に着目し

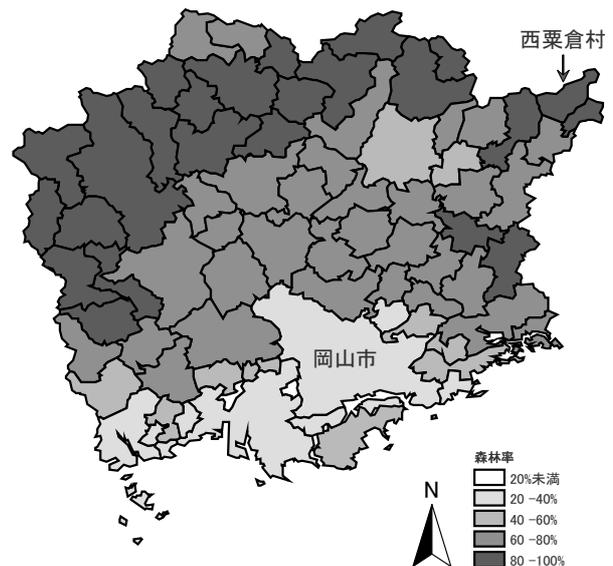


図1. 岡山県における森林率 (%)
(農林水産省大臣官房統計情報部 (2002) をもとに作成)

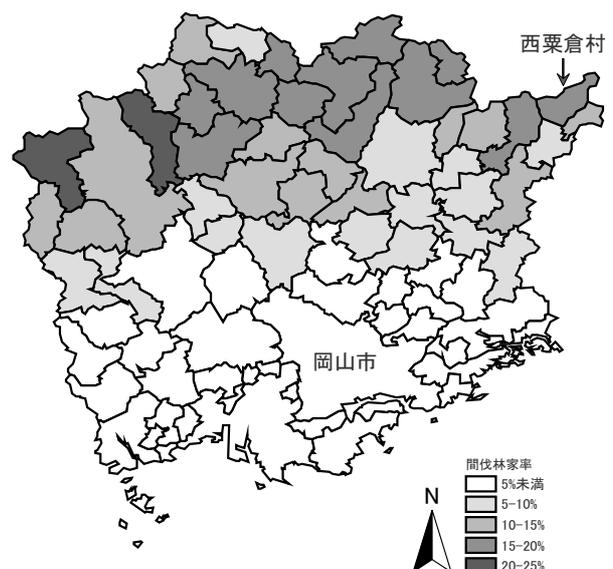


図2. 岡山県における森林間伐林家率 (%)
(農林水産省大臣官房統計情報部 (2002) をもとに作成)

た。同村は、林業で盛んな鳥取県智頭町に隣接し、また兵庫県とも隣接する位置にある。他の多くの岡山県市町村が2005～2006年に合併をしたのに対し、同村では合併が起こらなかった。そのため継続的な資料があり、過去にさかのぼった調査も行いやすいと考えられる。

そこで以下では、予備的な調査報告として、西粟倉村郷土史を参照しつつ、同村の林業の様子を紹介する。また同村を、2006年8月22日、9月14～15日、10月24日に訪れ、林業資料館のA氏、西粟倉村役場のB氏、また同村で木材加工業を営む木の里工房・木薫（もっくん）の社員、C氏・D氏・E氏に話を伺った。

林業の歴史

西粟倉村郷土史（1984）によれば、同村で林業が始まったのは江戸時代の安永年間（1772～1781）のこと、隣接する智頭地域から伝わってきたとされる。明治初期には、郡内最大の製糸工場経営者、豊福泰造が熱心に植林を行った。

西粟倉村は、岡山県下でも特に森林率が高い地域で、現在、土地利用の95%を山林が占め、そのうち84%が人工林である。人工林は、戦後植林されたものが多く、昭和30年代に植えられた現在40年生ほどの若齢林が全人工林の6割を占める。

表1は西粟倉村における保有山林規模別林家数である（1970年までは西粟倉郷土史、1990年以降は世界林業センサスのデータを用いた。1町＝1haとして計算した）。1960年から70年にかけて森林所有者の数が増加していること、とくに保有山林面積が10ha未満である小規模森林所有者の数が倍増していることがわかる。A氏によれば、急増した小規模森林所有者の多くは、もともと入会地でもあった採草地を使用者間で区分し、そこに植林したものである。

ところがその後、林家数は減少しており、特に保

表1. 西粟倉村の保有山林規模別林家数

調査年	1942	1960	1970	1990	2000
1-5ha	151	134	255	210	190
5-10ha	35	26	46	59	58
10-20ha	18	18	28	24	21
20-30ha	7	10	4	6	10
30-50ha	3	6	7	5	3
50ha-	4	3	5	3	2
計	218	197	345	307	284

有山林が5ha未満の林家の数が急落していることがわかる。野田・林（2003）は、現代の大規模森林所有者は経営的に森林管理を行っているのに対し、小規模森林所有者は良好な場所の管理すらできていないことを示している。日本の多くの森林所有者が小規模面積所有者であることから、今後の森林管理を考える上で、小規模所有者を分析することに意義がある。特に、1960年代以前から森林を持っていたもの、1960年代になって森林を所有したものを比較することには、非常に重要であろう。

林業の現状

最近の西粟倉村では主伐はほとんどなく、長伐期施業（大径木を生産するための施業）へとシフトしている。国の方針もあって、伐採後の植栽は広葉樹を混植することも多い。建前上、環境林としての森林をうたっているが、実際植栽される樹種は、サクラヤトチなど、用材樹種が植えられている。

西粟倉村独自の農業・林業振興のやりかたは、地域の自然資源と観光と結びつけることである。西粟倉村の観光資源は、スキー場・道の駅・レストラン・温泉・森林公園・宿泊施設など。利用者は、年間120万人ほどである。ただし、一時立ち寄り客が多いので、2004年から、立ち寄り客向けの観光の仕組みに移行している。農業は、耕地がないので、高齢者がほそほそつくっている農作物を道の駅で販売している。レストランでも、地元でできた農産物を直接農家から買い取り、食材として使っている。ま

た、間伐を行う所有者には、村から補助金（補助の条件は15～20年生以上の森林）を出している。

西粟倉村の山主の意識は比較的高い。10年ぐらい前までは林業も盛んであった。森林の管理は森林組合がほとんどを請け負っている。補助金を利用する場合、山主から組合に委託する。ただし、森林組合への委託は、施業のみである場合が多く、選木などは、山主が行っている。また大規模森林所有者のほとんどは間伐を実施している。

ところが6～7割を占める小規模森林所有者は間伐をしている人、していない人とさまざまである。また不在村者のほとんどは、森林管理を森林組合に丸投げしている。不在村所有者には、森林組合が年に何回か声をかけ、管理を促しているのが現状である。木材は自分の代では儲けにならないという。

規模以外の点では、どういう属性の森林所有者が森林管理への意欲が高いのだろうか。A氏は、山主の多くは現在60歳ぐらいで、自分の世代に植林した人が多く、そのことが高い意欲の原因ではないかと述べていた。B氏は、高齢の地主は、父祖の森林管理を見てきたために、先祖代々の山を守ろうという意識が強いのだろうと述べていた。D氏は、子孫のためと思って、自分で苦勞して植林した高齢の山主は、比較的意欲が高いと述べていた。

木の里工房・木薫の試み

木の里工房・木薫（もっくん）は、2006年の9月から、資本金10万円でスタートした。社員6名の木材加工会社である。これまでの加工業では、木材を切り出し、それを家具などの消費者にまで持っていくまでに、さまざまな中間業者を経ている。そのため、たとえば1立米（＝1m³。木材の容量単位）あたり1万円の木材が、消費者の手に渡るときには30万円位になる。木薫では、切り出しから販売まですべてまかなうことで加工コストを安くし、山主に市場より高値で買い取ることを試みている。同社の

代表取締役であるD氏は、「日本の林業が衰退しているのは木材価格が安すぎるからだ。自分たちが市場価格より高い値段での伐採を主張すれば、木を伐ってくれるよう申し出てくれる山主はいる」と述べる。

木薫は、トレーサビリティという、独自の付加価値を製品につけることを意図している。それぞれの製品の木材がどの山で切り出したもので、その山主がどのような苦勞をしていたのか、全てを説明することができる。また、研修で同社を訪れた子供たちに、それぞれの木の歴史を話すこともできる。「この木は君たちの親と同じくらいの年齢、同級生なんだ」と、木が生きていること。そして生きていた木を殺すことで、我々は製品を使うことができることを伝えると、子供たちの樹木に対する見方が変わるという。

また木薫は森林認証制度を取得している。これは、森が健全かどうか・森が正しく管理されているか・森に働く人たちの暮らしが守られているか、を基準に下される国際基準である。E氏は、「日本の林業は森林を循環利用する世界でも最高水準のものだ。東南アジアで日本の木材会社が豊かな自然を破壊している。地球環境を守るためにも、木薫を伸ばしたい」と述べる。またE氏は、自身が木薫に関わった経緯をこのように語る。「大阪でデザイナーとして働いていたとき、保育園から遊具を作ってほしいと頼まれた。だがコストが高くなってしまった。木薫のシステムなら安く遊具を提供することができる。国産材のヒノキは、殺菌性があり、子供が口に入れても問題がない」。

C氏は「西粟倉村で林業が盛んなのは、ここには山しかないからだ」と述べる。多くの農山村と同様、西粟倉村も過疎高齢化が進展している。B氏は「西粟倉村は林業しかない。林業を通じて、村を再生させたい」と述べていた。こうした強い村意識が彼らを動かし、木薫をつくりあげ、経営させている

のである。

また木薫は、廃校になった小学校の校舎を利用して、森の学校（森林体験のインターンシップ）を企画予定している。美術関係の大学生を呼んで、家具や遊具を作ってもらい、試作品は保育園に無料で提供し、良い作品は木薫、あるいは木薫が提携している会社が買い取る予定である。また父と子で来てもらい、一緒に家具をつくる体験をしてもらおうと考えている。森の学校の経験を通じて父子の会話を促進したい、とE氏は語る。

今後の展望

西栗倉村の状況から、我々は先行研究が述べてきたことを確認することができた。他地域と同様、西栗倉村の林業も決して楽観できる状況ではない。それでも西栗倉村で林業が成立しているのは、山主が先祖の木を守ろうと、あるいは子孫のためと思って木を大事にしてきたこと、また林業関係者が高い村意識を持っていること、資源として山（森林）しかないという制約条件、などである。

だが同時に、先行研究との差異にも気づかないわけにはいかない。他地域では、林業の長い歴史が、林業を通じて村を守ろうという意識の涵養に役立っているように見える。たとえば歴史ある吉野林業の山守などである（井戸田 2005）。ところが西栗倉村では、林業しか産業がなかったとはいえ、その歴史はけっして古いものではない。木薫の社員たちも、先祖代々からの林業者ではない。なおかつ6名の社員のうち、E氏を除く5名は20代から30代の若者である。

木薫の社員達が高い村意識を持っているのは、西栗倉村という場での生活を通して、地球環境や日本の親子関係、現代日本人の生活のありかたを考え直すという、大局的な視野に基づくもののように見える。森の学校を介してIターン者を期待している点からしても、佐藤（1998；2005）、林・野田

（2005）らが抽出した村意識とは、質的に異なるもののように見える。代表取締役のD氏自身が、一度は大阪で働いていた、Uターン者なのである。

また、経済的価値の低迷という、林業における最も大きな課題を、これまでの林業＝素材生産という構図から脱却し、加工・デザインまで一貫するという新たなスタイルに転換することで、克服しようとしている。このような新しい試みは、明確な分業による伝統的な林業でないからこそ可能であったとも考えられる。

今回の予備的な調査では、個々の山主に話を伺うことができなかった。Uターン者や移住者を含む、若者中心で構成された木薫を信頼し、木を切り出すことに合意した山主たちは、ただ経済的に困っているというだけの理由で、その企画に賛同したとは考えにくい。木薫の大局的な思想・趣旨への賛同と信頼関係によるものだろう。どのような属性の人が、経済マインドを超えた視点で木薫に賛同するのかを分析する必要がある。

また西栗倉村では、かつてタタラ製鉄（黒岩 1976）、木地師（杉本 1973）などの森林に関わる生業があった。どちらも、西栗倉村郷土史の生業の章に農業、林業と並んで紹介されており、同村でこの生業が盛んだったことを示唆するものである。現在、森林に関わっている人々は、必ずしも昔から林業に携わってきたわけではない。タタラ製鉄者、木地師など、森林に詳しいものが、明治以降になんらかのかたちで林業に携わった可能性は高い。A氏、B氏は、そうした生業者が林業に寄与した側面はわずかであろうと主張しているが、個々の山主の履歴、先祖の職業を調べることには意義があるだろう。

本論では、森林管理研究に関するレビューを行い、今後の研究の展望を示した。また、岡山県北部の西栗倉村を対象に予備調査を行い、現在、比較的森林管理意識の高い林業従事者は、これまで指摘さ

れてきた村意識・家意識・家産意識とは異なるようなモチベーションを有している可能性を示した。今後は、個々の山主の森林に対する意識を調べていく必要がある。そのため、各山主への聞き取り、林班図の分析、郷土史の発掘など、さらなる調査が課題である。

謝辞

この研究にあたって、西粟倉村の林業関係者の方々に貴重なお話をうかがいました。また森林総合研究所の林雅秀さんからは、草稿を読んでいただき貴重なご意見をいただきました。どうもありがとうございました。なお、本研究は科学研究費基盤研究C(課題番号18510039, 森野真理), および財団法人 八雲環境科学振興財団による助成を受けています。

引用文献

- 遠藤日雄(2002) スギの行くべき道. 全国林業改良普及協会.
- 林雅秀, 野田巖(2005) 森林所有者の施業意識とその形成要因について: 熊本県におけるアンケート調査結果から. 林業経済研究51: 1-9.
- 堀靖人(2000) 山村の保続と森林・林業. 九州大学出版会.
- 井戸田祐子(2005) 奈良県川上村における山守の実態. 森林計画誌39(2): 157-169.
- 黒岩俊郎(1976) たたら: 日本古来の製鉄技術. 玉川大学出版部.
- 西粟倉村史編纂委員会 編(1984) 西粟倉村郷土史 前

- 編. 西粟倉村.
- 野田巖, 林雅秀(2003) 再造林放棄林分の発生要因に関する解析(I): 森林の所有規模, 立地条件に着目した考察. Kyushu Journal Forest Research56: 36-41.
- 農林水産省大臣官房統計情報部 編(2002) 2000年世界農林業センサス 第1巻 岡山県統計書(林業編). 農林統計協会.
- 岡正雄(1994) 異人その他 他12編(大林良太編). 岩波書店.
- 堺正紘(編著)(2003) 森林資源管理の社会化. 九州大学出版会.
- 佐藤宣子(1998) 宮崎県耳川流域における林家の存在形態と森林管理問題. 林業経済研究 44: 3-10.
- 佐藤宣子(2005) 山村社会の持続と森林資源管理の相互関係についての考察. 林業経済研究 51: 3-14.
- 志賀和人(編著)(2001) 21世紀の地域森林管理. 全国林業改良普及協会.
- 志賀和人, 成田雅美(編著)(2000) 現代日本の森林管理問題: 地域森林管理と自治体・森林組合. 全国森林組合連合会.
- 杉本壽(1973) 山村社会経済の構造分析: 木地師制度研究序説. 巖南堂書店.
- 筒井迪夫(1985) 木と森の文化史. 朝日新聞社.
- 上久保達夫(2004) 農山村地域生活者の思想: 事例による実証的研究. 御茶ノ水書房, 東京.
- 山本信次(1994) 都市近郊林の社会的管理に関する一考察(I): 東京都多摩地域を中心に. 日林論 105: 95-96.
- 山本信次(編著)(2003) 森林ボランティア論. 日本林業調査会.

Abstract

This paper reviews the factors that influence forest management in Japan. It suggests that not only economic conditions, but also the sociological and historical conditions of forestry affect forest management. This paper also introduces a preliminary survey of forestry in a village, Nishiwakura-son, in Okayama Prefecture, Japan. Foresters with high awareness of management were interested in environmental issues and innovations in the Japanese lifestyle.

Key words: forest management, small forest owners, village identities

